場所から考える高齢者の地域居住

第1回　ニュータウンの空き店舗に開かれた施設でない場所：ひがしまち街角広場

Ibasho Japan　副理事長／千里ニュータウン研究・情報センター　事務局長　田中　康裕

1. 地域居住と場所

「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができる」[1]。現在構築が進められている地域包括ケアシステムが描く姿であり、これは地域居住と訳されるエイジング・イン・プレイスの理念とも重なっている。

高齢者の地域居住を実現するために、住宅は決定的に重要である。けれども、地域居住は住宅の中だけで完結するものではない[2]。買い物したり、散歩したり、知人に会ったり、お祭りに参加したり、音楽を聴きに行ったり、通院したり、子どもたちの姿を眺めたり、畑仕事をしたりなど、地域居住は住宅を中心としながらも、様々な地域の場所との関わりにおいて成り立っている。

地域の場所で展開される多様な行為は、地域包括ケアシステムが地域に期待する「生活支援・介護予防」の効果をもたらすかもしれない。ただし全ての行為が「生活支援・介護予防」を目的として行われるわけではなく、多様な行為がもたらす効果の1つとして「生活支援・介護予防」が実現されるのである。

高齢者の地域居住は住宅だけでも、「生活支援・介護予防」の観点だけでも捉えきれない。

経済学者の間宮陽介は「人間と場所との関係は……、場所の占め方がすなわち生活となるような相互不可分の内在的な関係である」、「人間が生活するということは人間がある場所を占める(take place)ということであり、人間存在の空間的形態が生活ということに他ならない」(間宮, 1999) と述べている。

人間と場所は「相互不可分の内在的な関係」にあり「人間存在の空間的形態が生活」だとすれば、地域居住を考える上で、人は地域の場所にどう居られるか、どう関われるかという視点が重要になってくる。そこで、この連載では地域の場所に注目することで、地域居住の可能性を描いてみたい。

今回取りあげるのは「まちの居場所」のパイオニア的存在の1つ、「ひがしまち街角広場」である。

「まちの居場所」[3]は、2000年頃から日本各地に同時多発的に開かれるようになった場所である。2015年施行の「介護予防・日常生活支援総合事業」(新しい総合事業) でサービスの1つとして盛り込まれた「通いの場」は、「まちの居場所」をモデルにしたものだとされている[4]。

2. 「ひがしまち街角広場」オープンの経緯

「ひがしまち街角広場」は2001年9月30日、千里ニュータウンの近隣センターの空き店舗を活用して開かれ、オープンからの約17年間にわたって地域の人々がボランティアで運営し続けてきた場所である (**表1, 2, 写真1, 2**)。

千里ニュータウンは大阪府吹田市と豊中市にまたがる千里丘陵に開発された日本で最初の大規模ニュータウンで、1962年に吹田市域の佐竹台から入居が始まった。「ひがしまち街角広場」のある豊中市域の新千里東町は1966年に入居が始まった。

写真1　ひがしまち街角広場

写真2　ひがしまち街角広場

アメリカの社会・教育運動家、地域計画研究者であるクラレンス・A・ペリーの近隣住区論 (ペリー, 1975) に基づいて計画された千里ニュータウンにおいて、各住区[5]の核と考えられたのが近隣センターである (**写真3, 4**)。近隣センターには歩いて日常生活を送れるように日用品を扱う店舗や公衆浴場、集会所などがもうけられたが、車社会化の進展や、集合住宅の住戸内への風呂場の増築などの生活環境の変化に伴い、次第に空き店舗が目立つようになっていた (**図1**)。

2000年、新千里東町が建設省 (現・国土交通省) の「歩いて暮らせる街づくり事業」のモデルプロジェクト地区に選定され、事業で行われた住民へのアンケート、ヒアリング、ワークショップをふまえて「7つのまちづくり提案」がなされた (山本ほか, 2001)。その1つが「近隣センターを生活サービス・交流拠点へ」であり、こ

表1　「ひがしまち街角広場」の概要

オープン		2001年09月30日
場所		大阪府豊中市新千里東町（千里ニュータウン）
運営日時	運営日時	11時～16時
	定休日	第4土曜・日曜・祝日
メニュー		コーヒー、紅茶、カルピス、ジュースなど（100円）
運営主体		ひがしまち街角広場運営委員会（任意団体）
運営体制		約12名のボランティアスタッフ
建物	建物	近隣センターの空き店舗を活用（有償で賃貸）
	面積	移転前：約30㎡　移転後：約75㎡
団体利用料		夕方（16時～）・運休日 ・2時間まで：500円 ・2時間以上3時間まで：800円 ・3時間以上4時間まで：1,100円 ※金額は2017年11月1日に改定

写真3　新千里東町近隣センター

写真4　新千里東町近隣センター周辺の様子

の提案を受けて、豊中市の社会実験としてオープンしたのが「ひがしまち街角広場」である。

「ニュータウンの中には、みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所はありませんでした。そういう場所が欲しいなと思ってたんですけど、なかなかそういう場所を確保することができなかったんです」。「ひがしまち街角広場」初代代表の赤井直さんの言葉である[6]。

ニュータウンとは学校、病院、集会所、店舗など種々の施設が計画的に整えられた町である。けれども、種々の施設を整えるだけでは、地域の人々が切実に求めていた「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」は実現されない。この言葉は施設のあり方に対する大きな問題提起となっている。

2001年9月10日、「ひがしまち街角広場」のオープンに向けて自治会連絡協議会、公民分館、校区社会福祉協議会、地域防犯協会の各組織の代表者らによる発起人会が設立され、実行委員会の構成、運営方法、実行委員会への参加の呼びかけ方法などが検討された。第1回目の実行委員会が開催されたのはオープンのわずか10日前の9月20日である。この実行委員会で「ひがしまち街角広場」の名称、赤井さんの代表就任が決められた。赤井さんは「地域交流、コミュニケーションの場所が欲しいんだからお茶ぐらい飲めるようにしましょう。お茶を飲むのはどうしたらいいか。素人ができることだから、紅茶かコーヒーぐらいしかないねぇ、日本

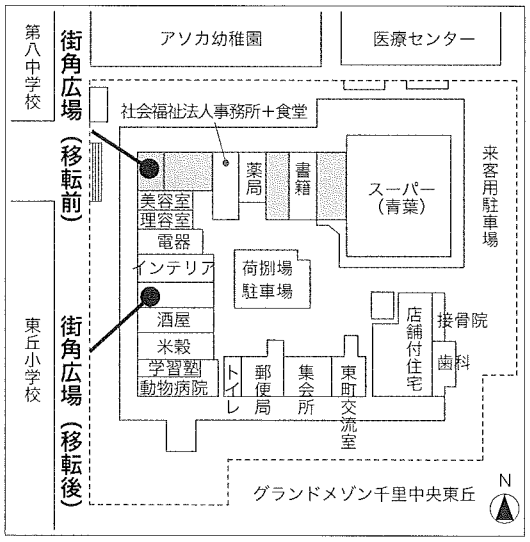

図1　新千里東町近隣センター（2018年8月現在）　グレーの網掛け部分は空き店舗

表２　「ひがしまち街角広場」の歩み

年	月	日	出来事
2000	8		新千里東町が建設省（現・国土交通省）の「歩いて暮らせるまちづくり」構想のモデルプロジェクトの対象地区に選定される
2001	1		「歩いて暮らせるまちづくり事業」の報告と意見交換の会を開催
2001	9	10	自治会連絡協議会、公民分館、校区社会福祉協議会、地域防犯協会の各組織の代表者らによる発起人会が設立
2001	9	20	第1回目の実行委員会が開催。「ひがしまち街角広場」の名称、赤井直さんの代表就任が決まる
2001	9	30	近隣センターの北西角の空き店舗を暫定利用する社会実験として運営スタート
2002	3	31	社会実験としての運営を終了
2002	4	1	行政からの補助金を受けない「自主運営」がスタート
2002	4	21	第１回たけのこ堀り開催。以降、2005年まで毎年４月にたけのこ掘りを開催
2002	10	5～6	１周年記念パーティー開催。以降、2013年まで毎年10月に周年記念パーティーを開催
2005	3	30	「第21回大阪府まちづくり功労者賞」受賞
2005	9	1	『街角広場アーカイブ '05』（編集：千里グッズの会）発行
2006	4	23	第１回たけのこ祭り（第５回たけのこ堀り）（主催：ひがしまち街角広場　共催：東丘公民分館　協力：豊中市・千里竹の会）開催。以降、2012年まで毎年４月にたけのこ祭りを開催
2006	4	28	移転先となる空き店舗の清掃・改装を始める
2006	5	2	近隣センター北西角での運営を終了
2006	5	6	場所を移転して運営再開
2006	5	27	「人間・環境学会学会賞」受賞
2006	10	4	「市制施行70周年記念事業・第６回豊中市都市デザイン賞」受賞
2007	12	4	『街角広場アーカイブ '07』（編集：千里グッズの会）発行
2011	5	15	「街角広場再スタート検討会」開催。Mさんが２代目の代表となる
2013	4	1	太田博一さんが３代目の代表となる
2014	4	20	第１回竹林まつり（第13回たけのこ堀り）（主催：ひがしまち街角広場）開催
2014	5	24	今月より毎月第４土曜日を定休日とする
2014	10	20～24	13周年記念バースデーウィーク開催
2016	10	9	15周年記念パーティー開催
2017	4	23	東町公園にて「春の竹林清掃＆地域交流会」開催（主催：ひがしまち街角広場　共催：東町公民分館、千里竹の会　協力：千里ニュータウン研究・情報センター、東丘ダディーズクラブ）。2018年４月にも開催

茶も出しましょう。それぐらいで誰がどんなふうにいれるか何も決まっていません。今から考えたら恐ろしいようなかたちでオープンしました」と当時を振り返る。

「ひがしまち街角広場」は2001年９月30日にオープンしたが、当初は12月末までの約３ヶ月間だけ豊中市の社会実験として運営される計画であった。けれども、せっかく開いた場所を閉鎖するのはもったいないという地域からの声に応えるかたちで、社会実験は2002年２月末まで延長。その後、2002年３月末までさらに延長された。そして、社会実験終了後には、行政からの補助金を受けない地域の人々による「自主運営」が行われることになった。

来訪者がいなければ赤字になるが、そもそも来訪者がいない状況は、「ひがしまち街角広場」が必要とされていないことを意味する。その場合は補助金を受けてまで無理に運営を続けるのではなく、「綿々と固執しないでさっぱりとやめようっていう約束」で「自主運営」を始めたということである。

「ひがしまち街角広場」は近隣センターの北西角の空き店舗を活用して運営されていたが、2006年の春で店舗の契約期限が切れることとなった。そのため、2006年５月６日からは同じ近隣センターの他の空き店舗に移転して運営が続けられることになった(**図２，３**)。先に述べた通り、

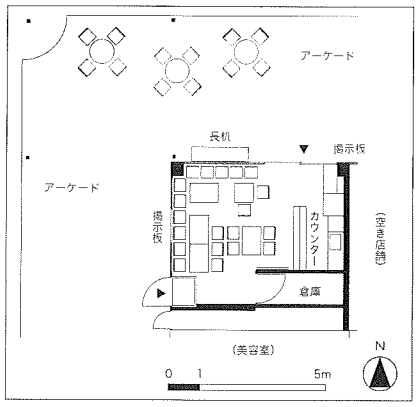

図２　移転前の「ひがしまち街角広場」

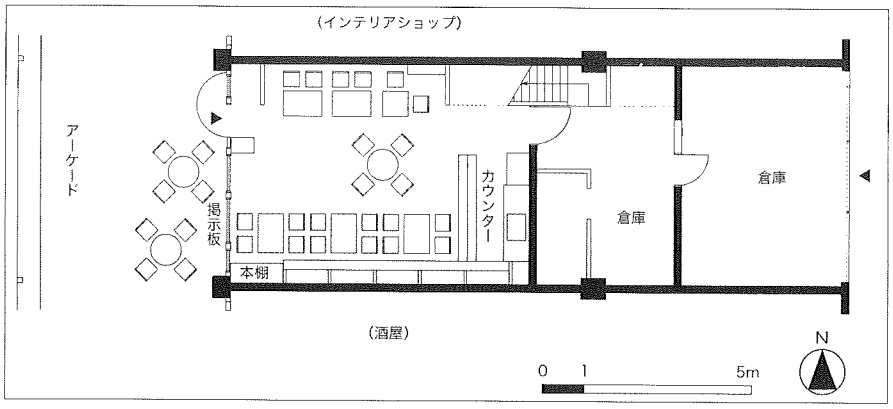

図３　移転後の「ひがしまち街角広場」

千里ニュータウンにおいて近隣センターは住区の核になる場所である。近隣センターの外へ出ると「ひがしまち街角広場」を運営する意味がないという考えから、近隣センターで運営することが重視されたのである[7]。

3. 「ひがしまち街角広場」の運営

「ひがしまち街角広場」は日曜を除く週6日、11時～16時まで運営されており、コーヒー、紅茶などの飲物が100円の「お気持ち料」[8]で提供されている。食事は提供されていないが、お弁当などを自由に持ち込むことができる。

11時～16時という運営時間は、ボランティアでスタッフを担う女性の負担にならないよう、朝の家事を終えてから来て、帰った後に夕方の家事ができることが考慮されて決められたものである。

「ひがしまち街角広場」には1日に30～40人程が訪れる[9]。来訪者の中心は地域の高齢者だが（**写真5**）、来訪者が属性によって限定されているわけではない。子どもたちが学校帰りに立ち寄ることは学校公認とされており、学校帰りの子どもたちが「おばちゃん、お水ちょうだい」と水を飲みに立ち寄ったり（**写真6**）、近隣センター隣の幼稚園に子どもを預けている母親グループが集まったりすることもある（**写真7**）。

運営時間は16時までだが、16時以降と運休日は有料で会場の貸し出しが行われている。利用時間が制限されている集会所や公民館と違い、時間を気にせず夜遅くまで利用でき、夜はアルコールを持ち込むこともできる。例えば、東丘小学校に通う子どもの父親を中心とする「東丘ダディーズクラブ」が懇親会を兼ねた集まりを開くなど、「ひがしまち街角広場」は地域活動の拠点という顔も持つ。

運営主体は任意団体の「ひがしまち街角広場運営委員会」である。NPO法人になると組織の枠組からはみ出すことに即座に対応しにくくなると考えられ、現在まで任意団体としての運営が行われている。「場所づくりしたところで、こちらの押し

写真５　日常の様子

写真６　水を飲みに立ち寄る子どもたち

写真７　母親グループの集まり

付けがあったらだめなんですよね。はっきり言えば来る人が作っていく、来る人のニーズに合ったものを作っていく」と赤井さんは話す。

オープン当初、スタッフの人数を確保するために自治会連絡協議会、公民分館、校区福祉委員会、地域防犯協会という既存の地域団体に担当日を割り振っていた。けれども、オープンから半月もたたないうちに団体に所属していない人が入りにくいという不都合が出てきたという。そこで、以降は既存の地域団体とは関係なく個人としてスタッフになるように変更されている。「ここに入るボランティアは、みな袴脱いで、肩書き脱いで、個人として入りましょうということにしました。それで何の団体にも関係の無い方々のボランティアで今もずっときております」と赤井さんは話す。

現在の日々の運営は、約12人のスタッフが2人ずつ日替わりで担当している[10]。スタッフの中には、オープン当初に地域団体のメンバーとして運営に関わり、その後は個人としてスタッフを続けている人もいれば、地域の団体とは無関係に個人としてスタッフになった人もいる。スタッフは全員が女性で、新千里東町に住んでいる人がほとんどだが、千里ニュータウンの他の住区や、千里ニュータウン外から来ている人もいる。

先に述べた通り社会実験期間中は豊中市から財政的な支援を受けていたが、「自主運営」を初めて以降、豊中市からの補助金は一切受けていない[11]。コーヒーや紅茶などの100円の「お気持ち料」と会場使用料により家賃、水道光熱費、食材費など全ての経費がまかなわれている。

4. 「ひがしまち街角広場」が実現してきたこと

①参加することなく居られる場所

「ひがしまち街角広場」の特徴は、プログラムが提供されていないことである。社会実験期間中は写真や絵画の展示、音楽コンサート、さおり織り体験、フリーマーケットなどのプログラムが行われていたが、「自主運営」が始まってからはほとんどプログラムが行われておらず[12]、定期的に行われているのは4月のたけのこ祭り・竹林清掃（**写真8**）、10月の周年記念パーティー（**写真9**）だけである。

ただし、プログラムを提供しないことが自動的に「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」の実現につながるわけではないことには注意が必要である。

こうした場所を実現する上で、「ひがしまち街角広場」にはいくつかのポイントがある。

まずは毎日運営されていることである。「週に1回とか、月に何回っていうのは、誰でもいつでも行ってみようかなと思った時に行けない、自由に出入りしてもらえない。今日行ったら閉まってた、今日はお天気悪いから閉まってた、行っても開いてるかなと心配になったら来てもらえないようになるから、いつでも行ったら開いてる安心感が一つの目的で毎日やっておりました」。こうした考えから、「ひがしまち街角広場」は当初から、毎日開いている場所として運営されている。

「お気持ち料」を支払って飲物を注文できることは、プログラムが提供されていない場所を訪れ、過ごすことの大義名分になっている。

訪れた人がどのように過ごせるかも大切である。多くの人が来訪者同士で、あるいは、スタッフと話をして過ごしているが、過ごし方は決められておらず、無理な関わりが求められることはない。本や新聞を読んだりして1人で過ごしている人もおり、「ひがしまち街角広場」は人々が思い思いに居られる場所になっている

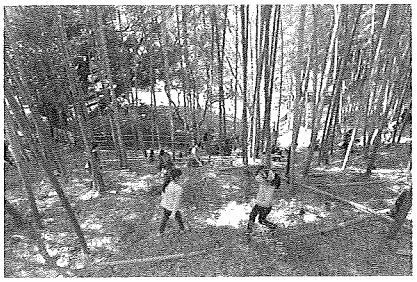

写真8　4月の竹林清掃

写真9　10月の周年記念パーティー

写真10　思い思いに過ごす人々

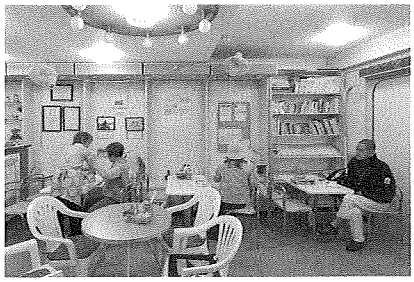

写真11　テーブル越しの会話

写真12　スタッフと来訪者との会話

写真13　移転作業

(写真10)。

「大きなテーブルの周りにいるのもいいだろうけど、自分1人だけのテーブルでこうやりたい時もあるかもしれない。色んなかたちがあるから、その時々で自由に使いこなせるようなものがいいみたいに思いますね」と赤井さんが話すように、小さなテーブルは1人でも居やすいしつらえである。

ただし、1人で過ごす人も含めて、それぞれのテーブルの人々が全く無関係に過ごしているわけでないことを見落としてはならない。「ひがしまち街角広場」で見られるテーブル越しの会話はこのことを現している(写真11)。

「ひがしまち街角広場」はみなが同じプログラムに参加するのでも、それぞれが無関係にバラバラに過ごすのでもなく、思い思いに過ごす人々が「居合せる」状況、つまり、「別に直接会話をするわけではないが、場所と時間を共有し、お互いどの様な人が居るかを認識しあっている状況」(鈴木，2004)が実現されている。

②自分たちで作りあげる場所

「ひがしまち街角広場」の運営はスタッフだけでなく、多くの人々の協力により成立している。この背景にはスタッフとスタッフ以外の人との緩やかな主客の関係がある。

「ひがしまち街角広場」のスタッフは給与や交通費など金銭的な報酬を一切受けない無償ボランティアである。わずかでも報酬を受けると同じ地域に住む者同士であってもサービスする側／される側というように関係が固定されてしまう。きちんとした報酬を支払えるならそれでもよいが、仮に支給するとしても中途半端な金額にしかならない。それなら無償ボランティアにする方がよいと考えられてのことである。「いくらかでもお金をもらってるとなったら、……、お金を出した方ともらってる方になりますよね。それよりも、みんな、どっちもボランティア。来る方もボランティア、お手伝いしてる方もボランティアっていう感じで、いつでもお互いは何の上下の差もなくフラットな関係でいられるっていうのがあそこは一番いい。その代わり暇な時は一緒に座ってしゃべる。忙しくなったら、お当番じゃない人がいきなり立って来て、エプロンもかけてないのに手伝いをする」と赤井さんは話す。

この言葉の通り、「ひがしまち街角広場」ではスタッフと来訪者とが一緒に話をしている光景をよく見かける(写真12)。来訪者の中には、忙しくなったらコーヒーを運ぶのを手伝ったり、テーブルの後片付けを手伝ったりする人もいる。写真や竹細工など展示できるものを持参する人もいる。

「ひがしまち街角広場」において、地域の人々はお客さんとしてサービスを受けるだけの存在ではないが、これは日々の運営に限らない。

2001年のオープン時には地域の人々も空き店舗の改修、清掃に参加した。テーブルや椅子などの家具、食器、掲示板などは家庭や公民館などからの持ち寄りによって揃えられた。赤井さんは「自分たちの家で余ってる物を持って来てるから、自分の身の丈に合ったものばっかりなんですね。……。だからそれを使い、上手く使いこなせたんだと思います」と話す。

2006年の移転作業にも多くの人々の協力がなされた。移転先の空き店舗の清掃、改修、壁・天井のペンキ塗装、家具の運搬などの作業は、豊中市からの財政的な支援を受けることなく、スタッフや来訪者、地域の人々らによって行われた(写真13)。

運営場所が完成してから活動が始まるのではなく、運営場所を作りあげること自体が既に活動の始まりなのである。

「ひがしまち街角広場」は地域の人々が飲物をいれたり、テーブルを片付けたり、写真や絵画を展示したり、ペンキを塗ったり、差し入れしたりというように、自分にできる具体的な役割を見出す余地のある場所であり、人々により少しずつ担われる役割の積み重ねによって「ひがしまち街角広場」は成り立っている。

③活動を立ちあげていく場所

「ひがしまち街角広場」は多様な人々が日常的に出入りする場所であるため、訪れた人同士が意気投合し、新たな活動を始めることがある。以前活動していた「写真サークル・あじさい」は、「ひがしまち街角広場」内に展示されていた写真を見た人が、このような写真を撮れるようになりたいと希望したことがきっかけとなり、写真を展示していた人を講師とするサークルとして立ちあげられたものである。「千里竹の会」は、「ひがしまち街角広場」で公園の竹薮が荒れているという話が出たのがきっかけとなり、「ひがしまち街角広場」での話し合いを通して立ちあげられたグループである。現在、「千里竹の会」は公園内の竹林を整備したり、間伐した竹を使って竹炭や竹細工を作るなど活発に活動している。

住まいのサポートと街の再生についての活動を行う「NPO法人・千里・住まいの学校」、千里ニュータウンのお土産の作成・販売、歴史の収集・発信を行う「千里グッズの会」[13]は、「ひがしまち街角広場」に集まった地域の人々、専門家、大学教員・学生らによって立ちあげられたグループである（**写真14**）。このように「ひがしまち街角広場」からは様々なグループが生まれている[14]。

地域の団体が会議や活動のために利用できる場所として、集会所や公民館がある。けれども「集会所は目的がきっちりしていて、申し込んでおかないと使えないんですね」というように、集会所や公民館は体制が整い、目的や内容がはっきりしている団体が利用する場所としては適している。その反面、メンバーを集めたり、活動の目的や内容をはっきりさせたりするなど、これから活動を立ちあげていく段階では利用しにくい。

新たな活動は必ずしも集会所や公民館における会議によって立ち上げられるわけでなく、事前に予約せずとも気軽に集まれる場所における会話が新たな活動を生み出すこともある。

写真14　千里ニュータウン研究・情報センターの会議

5. 「ひがしまち街角広場」からみる地域居住

「ひがしまち街角広場」は地域居住のあり方に、２つの重要な視点を示している。

１つは、特定の枠組みに収まらないことの許容である。施設において、人は属性によりカテゴライズされ、特定の振る舞いをすることが期待される。それに対して「ひがしまち街角広場」では、来訪者が属性によって限定されない、既存の地域団体とは無関係な肩書きのないスタッフ、プログラムに参加することなく居られる、無理な関わりは求められないが全く無関係でもない、目的が明確でなくてもいいなど、属性、所属、参加、交流、目的といった枠組みに収まらないことが許容されている。「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」は、特定の枠組みに収まりきらないことの許容の上に成立している。

もう１つは、地域の当事者になれることである。施設においては専門家がサービスを提供し、非専門家はサービスを受けるという役割分担がある。それに対して「ひがしまち街角広場」の運営は、地域の多くの人々の関わりによって成立している。さらに「ひがしまち街角広場」を越えて、新たな活動が立ちあげられていた。「ひがしまち街角広場」において地域の人々はサービスを受ける利用者ではなく、自分にできることを通して地域を作りあげる当事者になれる。地域は高齢者に何らかの恩恵を一方的にもたらすものではなく、高齢者もその地域自体を作りあげる当事者の一員だということを忘れてはならない。

<注・参考文献>

・さわやか福祉財団編（2016）『シリーズ住民主体のサービスマニュアル　第3巻　居場所・サロンづくり』全国社会福祉協議会
・直田春夫（2005）「千里ニュータウンのまちづくり活動とソーシャル・キャピタル」・『都市住宅学』No.49
・鈴木毅（2004）「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編『建築計画読本』大阪大学出版会
・千里グッズの会編（2007）『街角広場アーカイブ '07』ひがしまち街角広場
・田中康裕，鈴木毅，松原茂樹，奥俊信，木多道宏（2007）「日々の実践としての場所のしつらえに関する考察－「ひがしまち街角広場」を対象として－」・『日本建築学 会計画系論文集』No.620
・田中康裕「コミュニティ・カフェによる暮らしのケア」（2008）・高橋鷹志，長澤泰，西村伸也編『環境とデザイン（シリーズ〈人間と建築〉3）』朝倉書店
・田中康裕（2017）『「まちの居場所」の継承にむけて』一般財団法人長寿社会開発センター・国際長寿センター
・日本建築学会編（2010）『まちの居場所～まちの居場所をみつける／つくる～』東洋書店
・クラレンス・A・ペリー（倉田和四生訳）（1975）『近隣住区論』鹿島出版会
・松岡洋子（2011）『エイジング・イン・プレイス（地域居住）と高齢者住宅：日本とデンマークの実証的比較研究』新評論
・間宮陽介（1999）『同時代論』岩波書店
・山本茂，宮本京子（2001）「千里ニュータウンにおける取り組みと展望」・『地域開発』Vol.444
・厚生労働省「地域包括ケアシステム」のページ
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/

[1] 厚生労働省「地域包括ケアシステム」のページより。

[2] 松岡（2011）は、エイジング・イン・プレイスは日本で「住み慣れた地域でその人らしく最期まで」というスローガンで表されるものであり、「尊厳と自立」、「住まいとケアの要素」、「死ぬまでの居住継続」、「地域の問題」の４つのサブ概念によって構成されること、そして、エイジング・イン・プレイスを実現するためのポイントは「住まいとケアの分離」であり、その後の「住まいとケアの地域における再統合」であることを指摘している。

[3] コミュニティ・カフェ、地域の茶の間、地域のつどい場、まちの縁側などの名称で呼ばれることもあるが、ここでは「まちの居場所」という名称を用いることとする。

[4] さわやか福祉財団（2016）では「新地域支援事業における「通いの場」はまさに、「居場所・サロン」の仕掛けであ」ると指摘されている。

[5] 千里ニュータウンでは吹田市域に８住区、豊中市域に４住区、計12住区が開発された。新千里東町は豊中市域の１住区で、2018年４月１日現在の人口は8,754人、世帯数は4,230世帯、高齢化率は約31％である（住民基本台帳より）。

[6] 赤井さんは「ひがしまち街角広場」を「お寺の庫裡」のような場所だとも表現している。ペリー（1975）の近隣住区論では、教会を住区内に配置することに言及されているが、大阪府企業局が開発した千里ニュータウンでは、政教分離のため宗教施設はもうけられなかった。

[7] 現在、新千里東町の近隣センターは移転・建替の計画が進められており、「ひがしまち街角広場」は大きな岐路に立たされている。

[8] 「お気持ち料」は当初、テーブルの上の貯金箱に自分で入れるようになっていた。100円はあくまでも目安の金額だとされていたが、多くの人は100円を貯金箱に入れていた。2011年からは貯金箱に入れ忘れる人がいるということで飲物を運んできたスタッフに直接渡すように変更された。

[9] 来訪者数は「ひがしまち街角広場」のリーフレットより。来訪者数は「お気持ち料」の合計金額から算出されているため、飲み物を注文しなかった人、水を飲みに立ち寄った子どもたちなどは来訪者数には含まれていない。

[10] ボランティア２名で１日の運営を担当することがほとんどだが、３名の場合や、午前・午後でボランティアが交代するなどの場合もある。

[11] 使われている家具や電化製品の中で、補助金を受けて購入したのは、2014年10月に民間の団体から助成により購入したカウンターと冷蔵庫だけである。

[12] しめ縄作り、歌声喫茶、ウクレレ教室、

NPO法人千里・住まいの学校との共催による「街角土曜ブランチ」などが行われていた時期もある。

[13] 現在は千里ニュータウン研究・情報センター（ディスカバー千里）として活動している。

[14] 直田（2005）は「興味深いのは、この街角広場をふだん利用している住民がつながり、新しい活動をはじめるきっかけとなっていることである。……。いわば、市民活動の「ネットワーキングのノード」や「インキュベーションスペース」と言えよう」と述べている。

■プロフィール

田中康裕（たなかやすひろ）
Ibasho Japan　副理事長／千里ニュータウン研究・情報センター　事務局長

2007年、大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士後期課程修了、博士（工学）。大阪大学大学院特任研究員、清水建設技術研究所研究員を経て、2013年より岩手県において「居場所ハウス」の運営・調査に携わる。2014年より米国ワシントンDCの非営利法人・Ibashoがフィリピン、ネパールで進めるプロジェクトのサポートを行う。2015年よりIbasho Japan副理事長。大阪大学大学院在籍時から大阪府の千里ニュータウンにおいてまちの居場所、アーカイブ作りに関する研究・実践を続けており、2012年より千里ニュータウン研究・情報センター事務局長。
主な共著に『環境とデザイン（シリーズ〈人間と建築〉3）』（朝倉書店，2008年）、『まちの居場所』（東洋書店，2010年）。ウェブサイトはhttp://newtown-sketch.com。